

特別公開フォーラム

まちなか研究室を起爆剤にした
学生によるまちづくり

10

2011年7月に富山の中心商店街にまちなか研究室MAG.netがオープンしました。MAG.netを学生がどのように活用すればよいのか、学生、商店街、大学、富山市、それぞれが模索しています。そこで、まちなか研究室でまちづくりに取り組む大学の活動を紹介し、意見交換を行う特別公開フォーラム「まちなか研究室を起爆剤にした学生によるまちづくり」を開催しました。

1. 富山まちなか研究室MAG.net

これまで、富山市のTMOである「まちづくりとやま」では中心市街地での大学生のまちづくり活動を支援してきましたが、なかなかその活動がまちなかで定着しませんでした。そこで若者の来街促進や学生によるまちづくり活動の活発化をねらい「まちなか研究室」を設置しました。大学もまちなか研究室のような社会と学生の接点を求めていることから、設置に協力することになりました。

2. シンポジウム

「まちなか研究室を起爆剤にした学生によるまちづくり」

1) フォーラムのねらい

まちなか研究室を設置して学生が主体となってまちづくりを進める事例について造詣の深い研究者やまちづくり活動をする学生を招聘し、学生によるまちづくりの事例報告会と意見交換を行いました。

2) 話題提供

まず、まちなか研究室を持つ岐阜経済大学、一橋大学、富山大学からそれぞれが大学教育としてまちなか研究室をどのように活用しているのかについて報告が行われました。



● 富山まちなか研究室MAGネットの運営と大学教育としての位置づけ (富山大学 准教授 大西宏治)

まちなか研究室を活用した大学教育としては、(a) 地域社会と大学の接点を形成し、学生たちに地域調査などを実施する際に受け入れてもらいやすい状況を創り出す、(b) 学生たちが地域社会と接点を持った活動することにより、学生が体験的に社会を知る経験を積むことができる環境を構築するというねらいであり、そして

大学のキャンパス内では学びきれないものを学ぶ場所として設定されている。これまでにまちなか研究室を利用した実践が行われている。

● 岐阜経済大学の大学教育としてのマイスター倶楽部の取り組みについて (岐阜経済大学 菊本舞 准教授)

マイスター倶楽部は1998年10月に大垣商工会議所による「空き店舗対策モデル事業」として商店街内のスペースで活動が始まった。学生たちに国内外の経済情勢の変化と身近な日常生活や商店街との連続性を理解させることのできる実践的な教育の場として大学教育上には位置づけられた。2006年以降は、岐阜経済大学、大垣市商店街振興組合連合会、大垣商工会議所、大垣市の4者で協定を結び設置・運営がなされている。

● 人間環境キーステーションの取り組みと大学教育について (一橋大学 林大樹 教授)

人間環境キーステーションとは商店街、国立市、一橋大学、国立市民が協働してまちづくりを行う団体である。一橋大学では2002年から「まちづくり」授業が始まり、まちの課題解決に取り組む活動に単位を与えられるようになった。2003年には富士見台商店街内に地域活動拠点「くにたち富士見台人間環境キーステーション」(通称KF)がオープンし、そこを拠点とした学生の地域活動が行われた。ここでの活動を通じて、学生たちは地域課題の発見やそれに取り組む方法などを実践的に学ぶ中、成長していくし、まちづくりの背景に数多くの人が関わっていることを学んでいく。このように大学と社会の接点は、学生たちが成長を感じられる学習環境を生み出している。

3) パネルディスカッション

3者の講演を受けて、富樫教授の司会でパネルディスカッションが行われました。パネルディスカッションに先駆け、富樫教授の岐阜市での取り組みを紹介しながら論点整理が行われました。岐阜大学では地域科学部設置により、学生が地域学実習で地域調査を行うことになったこと、岐阜まちづくりセンターの設置により、まちづくり活動の拠点ができ、学生の中にはまちづくり活動に積極的に取り組むものが出たことが報告されました。

パネルディスカッションでは①大学にとって地域とつながる意味、②大学が置かれている地域の事情、③まちづくりとして学生は何を得るのかの三点で議論が行われ、どの大学も社会貢献の意識でこのような活動に取り組むことにはなったが、学生の成長につながるものになっていったこと、学生のこの活動を継続的に支援できるような大学の体制の整備の必要性などが指摘されました。